

米・ロ首脳会談（615号）

2025年 8月 石館

トランプ氏は15日午前、米アラスカ州アンカレジのエルメンドルフ・リチャードソン米軍基地に敷いた赤じゅうたんでプーチン氏が歩いてくるのを拍手しながら待ち構えた。



トランプ氏はB2戦略爆撃機とF35戦闘機を上空に飛行させ、再び握手した後米側が用意した大統領専用車“ビースト”でプーチン氏と会談会場に移った。

専用車への相乗りにはロシアの記者団から驚きの声上がるほどだった。プーチン氏は07年を最後に国連総会以外で訪米していなかった。ウクライナ侵略を受けて米政府が制裁を課しているプーチン氏を米軍基地に招いてもてなすトランプの対ロ融和姿勢が際立った。

米誌によると“トランプ氏は華やかな行事の成果をほとんど何も残さずワシントンに戻った”と酷評した。こわもてで知られるプーチン氏は笑顔や柔和な表情を交え、トランプ氏との友好ムードを醸成することに力を注いだ。

最近トランプは世界各地で起きている紛争に自分が調停役をやれば解決するとかばかり積極的に介入しているが、どれも中途半端で、ノーベル平和賞狙いのパフォーマンスだとも言われている。

このウクライナ侵攻問題は、トランプは自分が出ていけば、解決するであろうと安易に考えているのではないか。交渉相手のプーチンは不動産商いの交渉術とは違い、国際外交の中であらゆる権謀術数駆使してしたたかに生き抜いてきただけに、トランプより1枚も2枚も上手である。

今回のアラスカでの会談を評価するだけの情報も、分析する能力も小生は持っていないが、会談後記者会見に表れたトランプ氏の表情は厳しかったのに比べ一方トランプ氏と違って会談後も笑顔を保ち続けたプーチン氏は、米国の圧力をかわして侵略を続けるという狙い通りの成果を得たと内心ほくそえんでいるのではないか。

外野席でテレビを見たり、新聞を読んだりした感じでは今回の会談は、したたかなプーチンにトランプは手玉に取られた感じがする。これからウクライナのゼレンスキーも入った会談がある可能性があるが、成果をあせったトランプの仲介はうまくいかない可能性の方が大きく、ロシアに更なる攻撃の時間を与えてしまうのではないか。今後の交渉はどのような推移をたどるか予測は困難である。

今回の会談がアラスカでやることになったのでウクライナ侵攻の問題からちょっと離れてアラスカについて述べてみたい。

1966 年、小生が初めての海外駐在でドイツに赴任するとき、羽田から飛び立った飛行機が最初に寄港する場所はアラスカのアンカレッジであった。



アンカレッジ空港にある白熊の剥製に仰天したが、これが小生の長い商社マン生活の最初の海外の一步であった。

1957 年スカンジナビア航空はアラスカ中部のアンカレッジ国際空港を経由し、日本の東京とデンマークのコペンハーゲンを結ぶ北東アジア回りのヨーロッパ航空航路（ポーラールート）を開設した。ソ連領空の上空通過が禁止、あるいは解禁後も厳しく制限された反面、航空機の性能が向上し北極圏上空を通過する酷寒・長距離運航が可能となった 1960 年代から 1980 年代にかけて、アラスカは東アジアと西ヨーロッパや北アメリカを結ぶ中継地として重要になり、空港の拡充や物流拠点の整備が進んだ。

1970 年—1980 年にかけてよくヨーロッパに出張しており、当時はたまにはモスクワ経由もあったが少なくとも年 10 回はアンカレッジ経由であった。

空港の売店では怪しげな日本語を話す日系の女性がほとんどで、ヨーロッパに



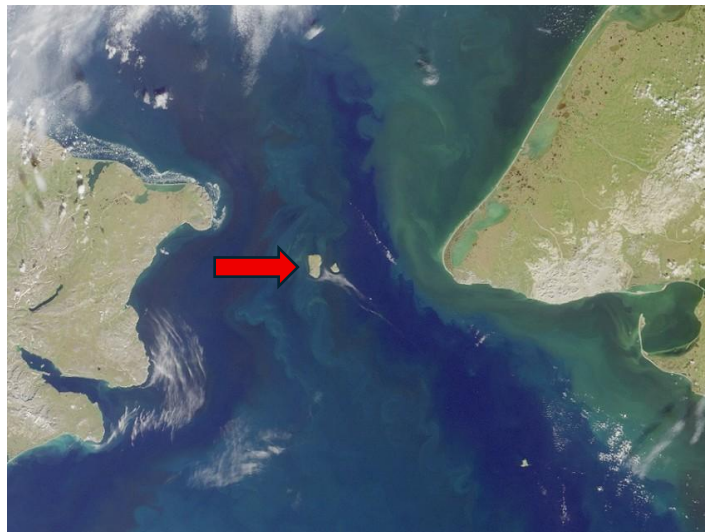
いる仲間にお土産を買ったり、たまにはうどんを食べたり、して空港でくつろいでいた。

1980 年代末以降、ソ連やその後継のロシア連邦が自国の上空を開放し、東アジアから西ヨーロッパへの無着陸で飛行可能な旅客機が登場したためポーラールー

トを利用する旅客便は殆ど無くなった。

それ以降小生もアンカレッジに立ち寄ることはなくなったが、いまだにアンカレッジ空港を懐かしく思い出す。

アラスカはロシア領だった歴史を持ち、米ロ“国境”の地として政治や外交の舞台



になってきた。アラスカはかつて“ロシア領”の一部であり、現在はロシアとアメリカを数マイルで隔てる国境の州だ。

赤矢印の先はロシア領ビッグダイオミード島、その右の小さな島は米国領リトルダイオミード島

両島は約 5 キロしか離れておらず、冬になると凍ったベーリング海峡の国境を歩いて渡ることが出来る。アラスカ本土とロシア本土との距離は 85 キロほどである。

ロシア帝国は 18 世紀にアラスカをロシア領と宣言し、アリューシャン列島などと共に“ロシア領”の一部とした。その後クリミヤ戦争の敗北などの影響で財政が悪化したロシアは 1867 年米国に 720 万ドルで売却した。

アラスカは外交史に度々登場する。2021 年 3 月には米中の外交官トップがバイ。デン前政権が発足してから初めて対面で協議した。ブリンケン国務長官（当時）は人権や台湾問題などで中国の対応に“深刻な懸念”があると指摘し、中国側は“内政干渉だ”と猛反発するなど記者団の前で 1 時間以上激しく応酬した。2 日間に及んだ議論は平行線に終わり、米中対立の本格化を象徴した。



アラスカからデンマークに向かう飛行機の中から見たオーロラを忘れられない

アラスカは日本とも縁が深い。昭和天皇は 1971 年、欧州 7 カ国を歴訪し、給油のためにアラスカ州

南部のアンカレッジに立ち寄った。

記憶にある方もおられると思いますが、当時のニクソン大統領が現地に赴き、異例の形で会談が実現した。在位中の天皇による初の外国訪問で日米友好を演出した。

先に述べたように 1867 年アメリカ合衆国に 720 万ドルで売却された。この交渉をまとめたのは国務長官であったウィリアム・スワードである。米国は 1865 年に南北戦争が終結したが、其の 2 年後にアラスカを買収した。米国も懷事情が厳しかったのではないかと想像される。このことは当時アメリカ国民から“スワードの愚行”“巨大な冷蔵庫を買った男”などと非難されたが、その後豊富な資源が見つかったり、アラスカが（主に旧ソ連に対する）国防上重要な役割を果たすことが分かり、現在では高く評価されている。

720 万ドルという買収価格がどのような根拠で計算されたのか、またスワード国務長官はアラスカの潜在価値をどのように見ていたのか興味があるが、このディールの関連資料は小生の手元にはない。しかし結果論とは言えこのようなディールを成立させたのは大変な先見性があったと感心させられる。

ウクライナの停戦交渉を巡っては、1938 年のミュンヘン会議の教訓がよく引き合いに出される。ヒットラーの要求に屈し、チェンバレン英首相らは同会議で、チェコスロバキアの一部割譲を認めてしまった。足元を見透かしたヒットラーが翌年ポーランドに侵攻し、第 2 次世界大戦が勃発した。チェコスロバキアをウクライナに置き換えると、現状は当時に似ている。今回の停戦交渉（和平交渉）は特に領土問題は難航が予想され、この種の交渉に素人なトランプが功をあせて、ウクライナに譲歩を迫ることも考えられ、将来に禍根を残さないようになることを願うばかりである。